

contents

- 〈展覧会紹介〉 特別企画展「富田溪仙～越前の紙漉きを描く～」
- 〈イベント報告〉テーマ展「今を生きる、時代を描く」
- 令和4年度 新収蔵品紹介
- 次回展覧会のお知らせ
- 美術館喫茶室二ホ特別メニューのお知らせ
- 休館日のお知らせ

- [2～3]
- [4～5]
- [6～7]
- [8]

表紙：富田溪仙《紙漉き》右隻（部分）1928（昭和3）年 東京国立近代美術館蔵 「富田溪仙展」より



富田溪仙《風神雷神》
左隻(部分) 昭和4年(1929)頃
滋賀県立美術館蔵



富田溪仙

TOMITA KEISEN

*新型コロナウイルス感染拡大防止のため、手指消毒、検温にご協力いただきますようお願いいたします。
*ご来館の際は、最新の開館状況および注意事項を当館ホームページにてご確認ください。

越前和紙の 漉き

2023 ※会期中無休
5/12(金) → 6/11(日)

【開館時間】午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
※5/12(金)は午前10時から
【主催】福井県立美術館
【後援】越前市教育委員会、福井新聞社、NHK福井放送局、FBC、福井テレビ、FM福井、福井ケーブルテレビ、さかいケーブルテレビ、丹南ケーブルテレビ、月刊URALA
【特別協力】福井県和紙工業協同組合
【観覧料】一般・大学生1200円
高校生 800円/中小生 500円
*20名以上の団体は2割引、障がい者手帳をお持ちの方とその介助者1名は半額 *他の割引との併用不可 *本展チケットで同時開催のコレクション展「ちいさいおきい」もご覧いただけます

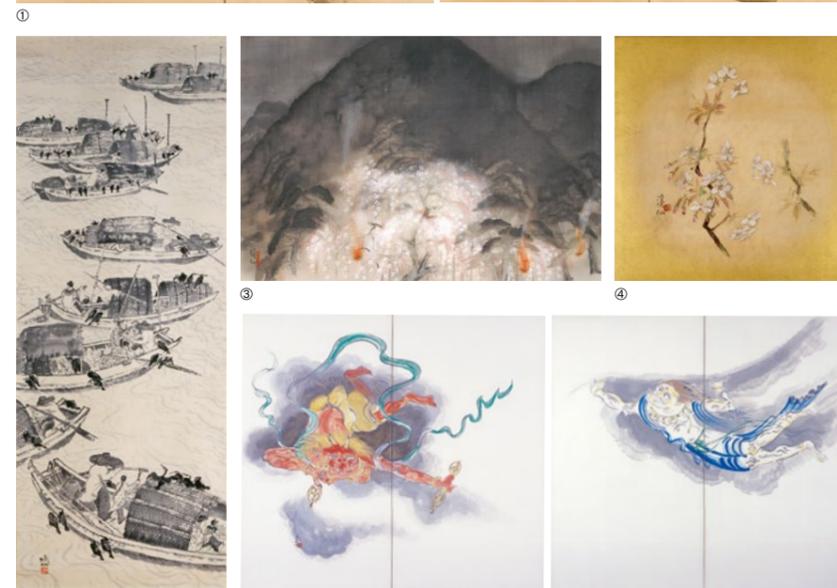


富田溪仙《紙漉き》
右隻(部分) 昭和3年(1928)
東京国立近代美術館蔵

とみたけいせん

富田

今、解き明かされる“越前和紙”と“日本画”の絆



① 富田溪仙《紙漉き》昭和3(1928)年 東京国立近代美術館蔵
② 富田溪仙《鵜舟》明治45(1912)年 京都国立近代美術館蔵
③ 富田溪仙《祇園夜桜》大正10(1921)年 横山大観記念館蔵
④ 富田溪仙 旧久遠宮家天井画の内《山桜》大正15(1926)年 聖心女子大学蔵
⑤ 富田溪仙《風神雷神》昭和4(1929)年頃 滋賀県立美術館蔵

越前和紙は国の重要無形文化財として福井が誇る伝統工芸の一つです。中世より脈々と続く技術が発展し、美術専用の和紙へと結実。欠かすことのできない基底材として、国内外の芸術家に愛されています。この美術専用紙誕生の裏側には、紙漉き職人と画家たちによる交流の軌跡が隠されています。

富田溪仙(1879~1936)は京都画壇出身で、再興日本美術院にも所属した異色の画家として知られています。早くから和紙を用いた作品を発表し、東西の日本画壇に和紙の魅力を広めることに一石を投じました。

溪仙は大正14(1925)年10月、越前の地を訪れ、和紙製作現場取材しました。そして3年後、再興第十五回院展出品作《紙漉き》(東京国立近代美術館蔵)を生み出します。現地写生をもとにしながら、室町時代の風俗で紙漉きの光景を描く本作は、詩情豊かな幻想世界へと私たちを誘います。古き良き伝統の息づく越前において、現地に根差す人々に触れた経験を理想郷として制作に昇華させた溪仙の芸術観が華開いた作品と言えます。

本展では、溪仙と紙漉き職人・岩野平三郎(1878~1960)との関係をもとに残された作品、写生、資料を通じて「描かれた越前の紙漉き」という切り口で近代日本画と越前和紙との関係を読み解きます。また溪仙の活動により越前和紙の魅力を知った画家たちの作品から、和紙作品の醸し出す味わい深い世界をご覧ください。

企画者：原田礼帆(福井県立美術館)

《関連イベント》

紙漉き体験ワークショップ

5/13(土)、14(日) 各日10:30~12:00、13:00~15:30

紙漉き職人と一緒に越前和紙の紙漉きを体験!

自分だけのオリジナル和紙が作れます。(所要時間30分程度)

【申込不要、観覧券必要】

【会場】美術館特設会場 【講師】RYOZO(柳瀬良三製紙所)

【協力】福井県和紙工業協同組合

【体験料】500円(税込)(観覧券をご提示の上、会場にてお支払いください)

岩野平三郎製紙所 岩野麻貴子氏トークセッション

6/3(土) 14:00~15:30

【申込不要、参加無料、観覧券必要】(※先着40名)

【会場】美術館講堂 【講師】岩野麻貴子氏(岩野平三郎製紙所 代表取締役社長、伝統工芸士)

「はじめてのかがやき

～北陸新幹線福井・敦賀開業1年前記念ドラマ」上映会

会期中通期(見どころ解説会開催中は休止)

【入場無料・申込不要】 【会場】美術館講堂(無料エリア)

見どころ解説会

5/20(土)、27(土)、6/10(土) 各回14:00時から

【申込不要、観覧券必要】(※先着40名)

【講師】展覧会担当学芸員(原田礼帆) 【会場】美術館展示室

美術館喫茶室ニホ 学芸員トークサロン

5/21(日) 18:00~19:00

【申込必要、観覧券不要】(※先着20名)

【会場】美術館喫茶室ニホ 【会費】無料(お飲み物をご注文ください)

【申込】福井県文化課(Tel:0776-20-0580、E-mail:bunka@pref.fukui.lg.jp) または美術館喫茶室ニホ(Tel:0776-43-0310)

豆本工房わかい 豆本&和綴じノート ワークショップ

6/4(日) 1日2回開催

越前和紙を用いて自分だけの豆本、和綴じノートを作りませんか?

【申込必要】

【会場】美術館特設会場

【講師】豆本工房わかい

【参加費】3,000円(税込・材料費、講師料込み)

【申込】福井県立美術館ミュージアムショップ E-mail:info@greenlab.jp

ナイトミュージアム コンサート

6/3(土) 18:00~20:00

【申込必要】

【参加費】3,000円(税込・特別解説、入館チケット、コンサート込み)

【申込】福井県立美術館ミュージアムショップ

E-mail:info@greenlab.jp



イベント情報の詳細はコチラまで

今を生きる、時代を描く

LIVING IN THE PRESENT, DRAWING THE TIMES



圧倒的な大画面の魅力で戦後日本画壇に旋風を巻き起こした横山操 [1920-1973] は、額に汗して働く人がすぐ分かるような生命のこもった、生活実感のある絵を描くことを信条としました。横山の盟友となるのが、昭和の琳派との呼び声の高い加山又造 [1927-2004] で、この2人がともに戦後日本画壇を牽引し、多摩美術大学で教鞭を執りました。

福井出身の日本画家・米谷清和 [1947-] は県立高志高等学校卒業後、多摩美術大学日本画学科へ進学。そこは絵の講評そっちのけで横山、加山の両氏が芸術論や人間論を戦わせる実に魅力的な空間だったといいます。在学中、横山に見込まれ横山操奨学金で渡欧。そこで過去の巨匠の技術には到底及ばないと絶望に近い諦めを感じますが、それでも絵が好きで自分を自覚し、過去でも未来でもない今の時代を生きる自分にしか描けないものに真正面から向かい合い、感じたままを精一杯描いてゆこうと決心します。迷いを捨てて描いた《エレベータ》(1972年)は日展に初入選し、「新しいタイプの絵」として世に

紹介されました。1971年に横山が脳卒中で倒れ、右半身不随になるなか、学生であった米谷は家族同様に付き添い、その最後を加山とともに見届けました。米谷にとって、53歳で亡くなった横山操との日々は濃密ながらも6年ほどで、加山と共に大学の後進の指導にあたった日々の方が長いものとなります。都市の雑踏を描いていても、どこか傍観者のような視点は、むしろ加山からの影響だといいます。本展は横山と加山の代表的な作品を1点ずつ、そして米谷の初期から近作までの58点が一堂に会しました。そこには熱血指導で学生たちの人格や性格までも慮った横山操、冷静に絵や技術についての的確な批評をした加山又造という2人の優れた師に、1人の青年が出会い、成長し、今に至るまで生きた時代を描き続けた軌跡が見て取れます。最後に、本展覧会の開催にあたり、貴重なご所蔵品を快くご出品してくださった県内所蔵家、関係機関に対し、心より感謝申し上げます。

本展出品作のご紹介



犬吠埼 1967~68(昭和42~43)頃 作家蔵
【作家の言葉】「僕の絵の中で唯一、横山先生の手が入っている作品。加山先生が横山先生の線を褒めるんですけど、線は全部横山操が描き直してくれて、実際3、4分で直線の溝引きをやりました。太いところも細いところもすべて同じ1本の筆です。デザインの仕事をしたこともあろうせいかもしれないけど、その技術はすごかったですね。そういう思い出のある作品です。」



あいつ(Y君) 1970(昭和45) 作家蔵
横山がたくさんの学生たちを一来店に飲み込んで連れて行き大散財しているのを申し訳なく思う米谷がもう少し手頃な値段の店を開拓し、横山に勧めたのが自由が丘の「LOTAS」だった。ここに描かれるのはその「LOTAS」。画面のY君とは米谷自身のこと、後ろに掛けてあるコートはこの頃着用していたもの。表情が悩まし気なのは、当時自分の絵の方向性に悩んでいたためだろうか。



終電車 1971(昭和46) 作家蔵
【作家の言葉】「(日展に落選した)3回目の時に、加山先生が額に入った絵を見て「米谷君、どこか出たの?賞もらったの?」って聞くから「いや、日展に落ちました」って言ったら、ずっと褒めてくれた加山先生が「米谷君日展やめたら。日展の絵描きは君の良さを分かんないんじゃないの?」って言うてくださったんですよ。今度は「つまんねえ、面白くない、ただ上手けりゃいいってもんじゃあは絵は」って4年間言われ続けたのが、初めてそれ以外のことを言ってくれて、ちょっと勇気が出て、その後にはささきの《KAZUAKI》とか《エレベータ》になっていきました。」



玉菊葵 1967(昭和42) 作家蔵
大学1年生の19歳の頃の作品。第20回福井県総合美術展に出品し、福井県教育委員会賞を受賞。高く評価された。

枯色 1968(昭和43) 作家蔵
院展春季展出品作

エレベータ 1972(昭和47) 当館蔵



【作家の言葉】「(日展に落選した)3回目の時に、加山先生が額に入った絵を見て「米谷君、どこか出たの?賞もらったの?」って聞くから「いや、日展に落ちました」って言ったら、ずっと褒めてくれた加山先生が「米谷君日展やめたら。日展の絵描きは君の良さを分かんないんじゃないの?」って言うてくださったんですよ。今度は「つまんねえ、面白くない、ただ上手けりゃいいってもんじゃあは絵は」って4年間言われ続けたのが、初めてそれ以外のことを言ってくれて、ちょっと勇気が出て、その後にはささきの《KAZUAKI》とか《エレベータ》になっていきました。」



刻々 1977(昭和52) 当館蔵
【作家の言葉】「明道中学の先生に「良い人物の条件は目と手の表情を描くことだ」って言われたことを思い出して、僕が興味を持っている人物には目も手もない。じゃあセオリーに逆してみようかと思いついて描いたんです。」

老(ふゆ) 1978(昭和53) 個人蔵



夏 1981(昭和56) 当館蔵
【作家の言葉】「これは組み合わせているけど、ここのおばあさんたちは東別院にお参りから帰るところで、特に右側のおばあさんは夏休みに帰省するいつも見かけたのに、その年は見かけなくて、亡くなったのかなとか色々なことを考えて描いた絵です。」



丸山の家 1982(昭和57) 作家蔵
【作家の言葉】「中国での移動はほとんど汽車でした。1回に25~30時間は乗って、20日間の行程のうち、汽車に乗っていたのが1週間分くらいあったんじゃないかな。文化大革命の後だから敦煌も壊された跡がありました。移動時間は多かったですけど、スケッチする時間はありましたよ。」



夏の一隅 1984(昭和59) 個人蔵
【作家の言葉】「画家は家族を描くと、視野が狭くなっていくというけれども、せっかだから家族の肖像を残しておこうと思って描いたものです。30代で子どもが3人、自転車に乗っているのが妻、乳母車を押しているのが僕です。」



午後 1989(昭和64) 作家蔵
窓の向こうには海、映り込んでいるのは後ろの建物内の風景である。人は背後のものを見ることができないのに、窓に映し出され、海と重なる複雑な風景を目にすることができるのである。



左: 蝉の鳴く頃 1985(昭和60) 福井新聞社蔵
右: 雷、降りしきる 1985(昭和60) 当館蔵



秋、日の無い日 1993(平成5) 当館蔵
【作家の言葉】「ビルの中から見ると風の音も聞こえず、普通日が照っていると影が出るのに、この日は見えない。だから何も無いという感じも含めて《日の無い日》ってしました。東急プラザのビルが壊されるのが決まりました時です。ビルの中に入るとパントマイムの世界のように、ちょっと不安に思いつながり描いた絵です。」



真夜中の雨 1991(平成3) 作家蔵



夏の或る日 1995(平成7) 個人蔵

1. 雨上がりの音・朝
2. 雨上がりの音・昼
3. 雨上がりの音・夕
4. 小春日 2000(平成12) 当館蔵 / 5. 夜の川辺 2005(平成17) 作家蔵 / 6. 音花火 2007(平成19) 作家蔵 / 7. 永代映し 2008(平成20) 作家蔵
8. 新大橋 夕景 2008(平成20) 作家蔵 / 9. 群星 2009(平成21) 作家蔵 / 10. 明日の夜も 2010(平成22) 作家蔵 / 11. 夜時雨 2011(平成23) 作家蔵
12. 何気な春 2015(平成27) 作家蔵 / 13. そぞろ眺むー春の夜 2016(平成28) 作家蔵 / 14. 僕と日々 2019(令和元) 作家蔵
15. そよざさめく 2020(令和2) 作家蔵 / 16. さざめきと 2020(令和2) 作家蔵



初夏と朝霧 2021(令和3) 作家蔵
【作家の言葉】「目の前の川にざっと200匹ちかく鯉が泳いでいる。その間にカワセミが横切って飛んでいた。窓から見える小自然な眺めが気に入って引越してから30年になる。武蔵野を細く流れる野川に来るダイサギ、チュウサギ、コサギは群れからはぐれたのだから少数羽づつである。他にアオサギ、ゴイサギ、川鶴も少数又は単独である。鴨類はまだいてくれる。住み始めて2、3年目に隣の緑地に水車公園を造るための飛び石を置き川を浅くする工事で鯉がいなくなった。鳥たちも近くの調整池の改修工事が2年前から始まり早朝にしか見かけることができなくなった。今年は珍しく夏に近いのに朝霧が立った。窓から眺める光景から始まりいつの間にかどこかにあるだろう風景になってきた。」



長雨をうべなう 2022(令和4) 作家蔵
【作家の言葉】「この春はうんざりするほど雨が止むのを待った気がする。もはや異常とは言えなくなった気象変動による自然災害、武漢から始まった新型コロナ感染はあれよあれよという間に世界中に拡がり社会の仕組み行動を変えて日常生活の人の距離感をも変えてしまった。そしてあつてはならぬロシアのウクライナ侵襲、その長期化と先を見通せない政情不安と経済の不確実性、予期できないそれらの混沌とし一変する出来事は既に地球規模である。ただどんなに困難な激動の中でもそれぞれの文化と文明はそれらうべなうながら耐え育み紡ぎながら遅く進化している。」

関連イベント

●米谷清和氏ギャラリートーク

【日時/参加人数】 4月5日(水) 11:30~13:30/50名
4月16日(日) 14:00~15:30/40名



●スペシャル対談「画家の生きざま ~横山操、加山又造、米谷清和~」

【日時】 4月15日(土) 14:00~15:00
【登壇者】 米谷清和氏(日本画家)
佐々木美帆(当館学芸員)
【参加人数】 80名



●学芸員によるギャラリートーク

【日時】 4月22日(日) 14:00~15:00
【参加人数】 23名

令和4年度新収蔵品紹介

【寄贈】

きむらもりかず
木村盛和

「エメラルド釉窯変結晶茶盃」 徳本道輝氏寄贈

2012年（平成24） 陶器

木村盛和は京都市に生まれた。1976年に福井県にて築窯し、以後当地にて作窯を続けた。本作は木村自ら最高の出来と自負した、エメラルド釉の茶碗である。大ぶりの茶碗の見込みから口縁にいたるまで、器面全体に結晶が現れている。結晶一つ一つの輪郭がはっきりしており、宇宙に浮かぶ星のごとく結晶が光を反射する様子は見事である。窯の中の一瞬の変化を捉えることに生涯をかけた、木村盛和畢生の作といえる。



【寄贈】

とだせいじゅ
戸田正寿 作家寄贈

「宝焼耐 純」 1980年頃 103×145.6cm オフセット、紙

「PARCO (1)」 1983年 108.5×78cm オフセット、シルクスクリーン、紙

「PARCO (2)」 1983年 108.5×78cm オフセット、シルクスクリーン、紙

「テクノコスモス EXPO'85 (1)」 1985年頃 103×145.6cm オフセット、シルクスクリーン、紙

「テクノコスモス EXPO'85 (2)」 1985年 103×145.6cm オフセット、シルクスクリーン、紙

「NHK大河ドラマ 武田信玄」 1987年 103×145.6cm オフセット、シルクスクリーン、紙

「Future Under Crying Kids」 1995年 145.6×103cm オフセット、シルクスクリーン、紙

「AERA (1)」 1998年 145.6×103cm オフセット、紙

「AERA (2)」 1998年頃 145.6×103cm オフセット、紙

「知覚するかたち」 2000年 73×51.5cm オフセット、紙

「サントリーミュージアム (1)」 2001年頃 150.4×103～107cm オフセット、シルクスクリーン、紙

「サントリーミュージアム (2)」 2001年頃 150.4×103～107cm オフセット、シルクスクリーン、紙

「サントリーミュージアム (3)」 2001年頃 150.4×103～107cm オフセット、シルクスクリーン、紙

「HEIAN」 2005年頃 103×145.6cm オフセット、紙

「疾走する日本車（アート） —1960年代を主軸とする国産車の軌跡— (1)」 2010年 73×51.5cm オフセット、紙

「疾走する日本車（アート） —1960年代を主軸とする国産車の軌跡— (2)」 2010年 73×51.5cm オフセット、紙

福井県出身の戸田正寿（1948～）は、日本を代表するアートディレクター。アーティストックでクリエイティブな数々の広告によって、それまでの常識を覆し、新しい広告像を提示。国際的に高い評価を得るとともに、多くの人々を魅了してきた。

本収集では、一時代を築いた戸田の広告作品や作家の円熟期を示すアート作品を中心に、戸田正寿のクリエイティブの軌跡に触れることのできる16点の寄贈を受けた。



左：「Future Under Crying Kids」
右：「PARCO (1)」



【寄贈】

じゅうろくだい らくきち ざ えもん
十六代 樂吉左衛門

「赤茶碗」 徳本道輝氏寄贈

2021年（令和3） 陶器

十六代吉左衛門は東京造形大学彫刻科を卒業、イギリス留学を経て樂家の作陶に入り、2019年に樂家当主を継いだ。本作は襲名記念展に出品された赤樂茶碗である。器形は筒状に近く、薄くゆがみのない口づくりや張りの強い腰、胴に対しやや小さめの高台が特徴である。洗練されたかたちに対し、片身がわりのような大胆な釉景が対照的である。



令和4年度に新たに寄贈を受けた作品28点から一部を紹介。

【寄贈】

かわ い いさむ
河合勇

「ハイウェイシリーズ HW10」

土岡秀一氏寄贈

1971年（昭和46） キャンバス、油彩

福井県ゆかりの作家。美術、演劇、写真など幅広い分野に関心を持ち、絵画だけでなく立体造形やイベントなど、あらゆる方向で芸術活動を行った。

本作は「北美文化協会」との関わりが深く、土岡秀太郎旧蔵資料としても貴重である。



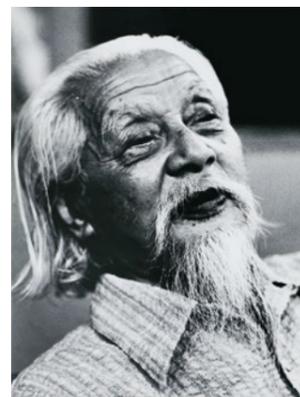
【寄贈】

みず や ち けん じ
水谷内健次

「土岡秀太郎の肖像」 土岡秀一氏寄贈

1970年代 ゼラチンシルバープリント

福井在住の写真家・水谷内健次（1943年～）は、移りゆく自然と人間の関係を記録した写真が高く評価されている。水谷内は「北美文化協会」との関わりも深く、本作は晩年の土岡秀太郎の人物像を見事にとらえた肖像写真である。



肖像写真である。

【寄贈】

おかもと た ろう
岡本太郎

「北美「岡本太郎展」ポスターのための原画」 土岡秀一氏寄贈

1955（昭和30）年 頃紙、水彩

岡本太郎（1911～96）は前衛芸術の推進者の一人として活躍し、反伝統主義にもとづく独自の文化論を展開した。絵画、立体、パブリックアートから生活用品まで、強烈なインパクトのある作品を次々と生み出し、日本万国博覧会（大阪万博）の核となる「太陽の塔」をプロデュースし、晩年は「芸術は爆発だ!」の流行語とともにお茶の間の人気者にもなった。

本作は、戦後の福井で結成した「北美文化協会」との関わりも深く、土岡秀太郎旧蔵資料として貴重である。



【寄贈】

つち お か ひ で た ろう
土岡秀太郎旧蔵

「土岡秀太郎関連資料一括」 土岡秀一氏寄贈

大正期～昭和期 スクラップ帳・書籍

土岡秀太郎（1895～1979）は、福井県王子保村（現越前市）出身の美術評論家、美術指導者。福井出身で未来派美術協会の中心人物である画家の木下秀一郎らと「北荘画会」を結成し、前衛芸術運動を推進した。戦後は「北美文化協会」を組織。約60年にわたり福井における前衛美術運動の発展と郷土文化の向上に生涯を賭けた。本資料類は土岡秀太郎旧蔵資料として極めて貴重である。



【寄贈】 ほか6点

■ 峯岸勢晃「月白青瓷茶碗 銘 飛翔」	陶器	2021年（令和3）	徳本道輝氏寄贈
■ 古谷宣幸「黄天目茶盃」	陶器	2021年（令和3）	徳本道輝氏寄贈
■ 羅森豪「木葉天目 銘 菩提」	陶器	2019年（平成31／令和元）	徳本道輝氏寄贈
■ 河合勇「作品（原題不詳）」	キャンバス、油彩	1952年（昭和27）前半	土岡秀一氏寄贈
■ 河合勇「ハイウェイシリーズ HW36」	キャンバス、油彩	1971年（昭和46）	土岡秀一氏寄贈
■ 宮川教助「土岡氏像」	キャンバス、油彩	1926年（大正15）	土岡秀一氏寄贈



北原照久氏

「北原照久 “お宝”大コレクション展」

[会期] 令和5年 7月14日(金)～8月31日(木) 会期中無休

人気鑑定バラエティ番組のレギュラー鑑定士として広く知られるコレクター・北原照久。彼の審美眼で選ばれた貴重で懐かしいブリキのおもちゃ、ミニチュアジオラマ、モーションディスプレイから現代アートまでを一堂に披露します。

藤子不二雄、赤塚不二夫ら著名漫画家達が集ったときわ荘の寄せ描きカーテン、横尾忠則が描いた状況劇場のポスター、ビートルズや松田聖子など人気アーティストのレコードジャケット、'50～'60年代の若者を魅了したジュークボックスやアメ車サンダーバード(実車)、映画「スターウォーズ」で実際に使用されたマスク等、多岐にわたるジャンルの北原コレクションを過去最大規模で紹介! その魅力に迫ります。



《フォード・サンダーバード》1956年 北原照久氏蔵



「富田溪仙展」の
展覧会特別メニュー



「きなこプリンと 黒糖レンズ豆の パリパリワシワシ パフェ」

トロトロの黒豆きなこプリンの上に、二ホ自家製の黒みつ練乳アイスと黒糖で炊き上げたレンズ豆を合わせ、和紙イメージのパリパリを添えました。

美術館喫茶室 二ホ

[営業時間] 9:00～19:00

[定休日] 月曜日および
美術館休館日

*Facebook、Instagramにて
ご案内

[電話番号] 0776-43-0310

*フリーWi-Fi



Facebook



Instagram

お知らせ

◎2023年5月～7月の休館日について

館内メンテナンス、展示替え等のため下記の日程は休館とさせていただきますのでご了承ください。※■は休館日です。

2023年 5月 May							6月 June							7月 July						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6					1	2	3							1
7	8	9	10	11	12	13	4	5	6	7	8	9	10	2	3	4	5	6	7	8
14	15	16	17	18	19	20	11	12	13	14	15	16	17	9	10	11	12	13	14	15
21	22	23	24	25	26	27	18	19	20	21	22	23	24	16	17	18	19	20	21	22
28	29	30	31				25	26	27	28	29	30		23	24	25	26	27	28	29
														30	31					



美術館のHPはこちら